

目 次

1. 調 査 概 要	1
2. 調 査 対 象 地 域 図	4
3. 大分県の植生の概説	5
4. 大分県植生図凡例一覧表	10
5. 凡 例 解 説	15
6. 植 生 調 査 表	36
7. 資 料 リ ス ト	95
8. 調査担当者名簿	97

1. 調 査 概 要

(1) 大分県現存植生図の基礎

今回の植生調査の基礎資料とした5万分の1大分県植生図は、第2回自然環境保全基礎調査に続いて使用したもので、1973年鈴木時夫監修により、当時の大分生態談話会研究グループの方々の協力で、大分県が発行したが、図示に用いた植生区分は50である。この植生図は県下の研究者の植生調査に基くこれまでの成果を、「植物群落組成表」に組み、植生社会学的現存植生図を作成したものである。

(2) 植生図凡例の取り扱い

植生図凡例一覧表（増補改訂案一昭54.4-）には、第1回基礎調査（1973年）に用いた大分県の凡例が、「第1回基礎調査時の環境庁凡例に各県から追加された凡例等で他に含められるもの」として記載され、群落番号、コード番号が付されている。

そこで、環境庁の統一凡例に原則的に従いながら、大分県凡例の主体性は失わないように心がけた。その結果、両者が同一の場合は環境庁凡例。大分県凡例でも同表にコード番号がつけられているものについては、環境庁凡例との関連性を示して、「……に含める」としてあるが、今回も大分県凡例の群集名とコード番号を使用した。但し前回報告書のコード番号等について訂正したところもある。

なお、群集名については、これまで大分県で用いてきたものが、林冠群代表種と林床群代表種が逆になっている場合（例：ツクシシヤクナゲー ブナ群集）は、命名当時の群集名（ブナ — ツクシシヤクナゲ群集）を用い、環境庁凡例を（ ）内に記載した。

(3) 表示番号の欠番について

今回、大分県が使用した植生区分の数は、植生図凡例一覧表に示すように56であるが、表示番号は1～67となっている。このうち2, 8, 9, 10, 13, 30, 33, 43, 44, 51および64の11植生図分は欠番になった。これは、第2回基礎調査（1979年）の実施の際、全県図面の完成を目途に、当時適用した植生区分に通し番号を付し継承したものであるが、結果的に今回の調査対象地域には存在しなかったためである。また、植生区分の適用が明確にできなかったり、小面積のために表示ができず使用しなかったものもあるが、次の植生調査では、凡例の再検討も含めて見直す必要がある。

(4) 植生単位の検討

① 新たに追加された植生単位

本調査で前回（1979年）に用いた植生区分以外に使用したものは、次の8植生単位で

である。

- 5 (481) アカマツーヒメコマツ群落 (ヒメコマツ林を含む)
- 21 (661) アラカシーナンテン群集
- 23 (6A1) コジイークロバイ群集 (サカキーコジイ群集のうち)
- 28 (6H1) ウバメガシートベラ群集
- 29 (6H3) ハマビワ－オニヤブソテツ群集 (マルバシャリンバイ低木林を含む)
- 31 (6M0) 河辺ヤナギ低木群落 (河辺低木林を含む)
- 32 (6O0) ビロウ群落, ヤシ群落 (ビロウ・アコウ林を含む)
- 40 (7A2) アカマツ－オンツツジ群集 (オンツツジ－アカマツ群集)

(注) 数字は表示番号, () 内の数字と記号はコード番号。

② 植生単位の検討

凡例の整理, 再検討をするなかで, 下記の植物群落について検討を加えた。

a. 4 (460) ヒノキ群落

前回は (462) ヒノキーツクシジャクナゲ群集を使用した, 県南部の祖母・傾山地域で新たに追加された群落と対照して変更した。

b. コジイ林

従来, 本県で用いているコジイークロバイ群集とコジイークロキ群集を前回はまとめて 24 (6A0) サカキーコジイ群集 (コジイークロバイ群集及びコジイークロキ群集を含む) として扱っていたが, 今回, 県南地域に特徴的なクロバイを伴うコジイ林を新たに使用し, 23 (6A1) コジイークロバイ群集 (サカキーコジイ群集のうち) を追加した。

c. タブ林

タブーイノデ群集とタブーホソバカナワラビ群集はタブ林としてまとめ, 27 (6E4) タブーイノデ群集とした。

d. マツ林

マツ林については, この森林のもつ立地条件と複雑な群落構造から, 植生単位の識別と適用が困難であるが, マツ林が立地する地質, 地形条件や標高を加味して分離した。母岩の浅い尾根や岩角地にあり, 自然林要素を多く含むアカマツ林をそれぞれ 39 (7A1) アカマツ－ヤマツツジ群集, 40 (7A2) アカマツ－オンツツジ群集, 島や海岸崖斜面に残るクロマツ林を 41 (7B0) クロマツ群落として, ヤブツバキクラス域代償植生に含めた。低地や丘陵地にある植林されたマツ林を 49 (911) アカマツ植林 (クロマツ植林を含む) として図示したが, それぞれのもつ森林の生態と凡例の適用については, 今後の研究課題とされるものが多い。

e. 52(717) クヌギ群落

クヌギ植林やその他の落葉広葉樹植林を含んでいるが、大分県の場合、火山性高原や火山灰がおおう丘陵台地に広く植栽されている。この群落は写真判読だけでは34(710) コナラ群落と区別しにくい、コナラ林は一般的には落葉広葉樹林帯の崖や急傾斜地に分布している。

f. 35(720) シイ・カシ萌芽林

シイ林やカシ林がまとまっていない群落について用いたもので、低木でやぶ状態の所が多く、36(730) 伐跡群落との区別が困難であった。従って伐跡群落でも最近のマツ枯れ現象の結果生じた植生は、群落の識別がむづかしく、シイ・カシ萌芽林に含めた場合が多い。

g. 55(9A0) 桑園と56(9B0) 茶園

桑園と茶園は写真判読が困難で、狭い面積では表示ができなかった。

h. 42(7K0) クズ群落と45(831) ミゾソバ・ヨシ群落

これらの群落については、最近の世相を反映して土地の未利用地や河口付近の河川敷などで目についた。

なお、64 干拓地については、59 年度調査の当初に設定したが、結果的に該当する植生がなく欠番とした。

(5) 調 査

① 調査対象地域

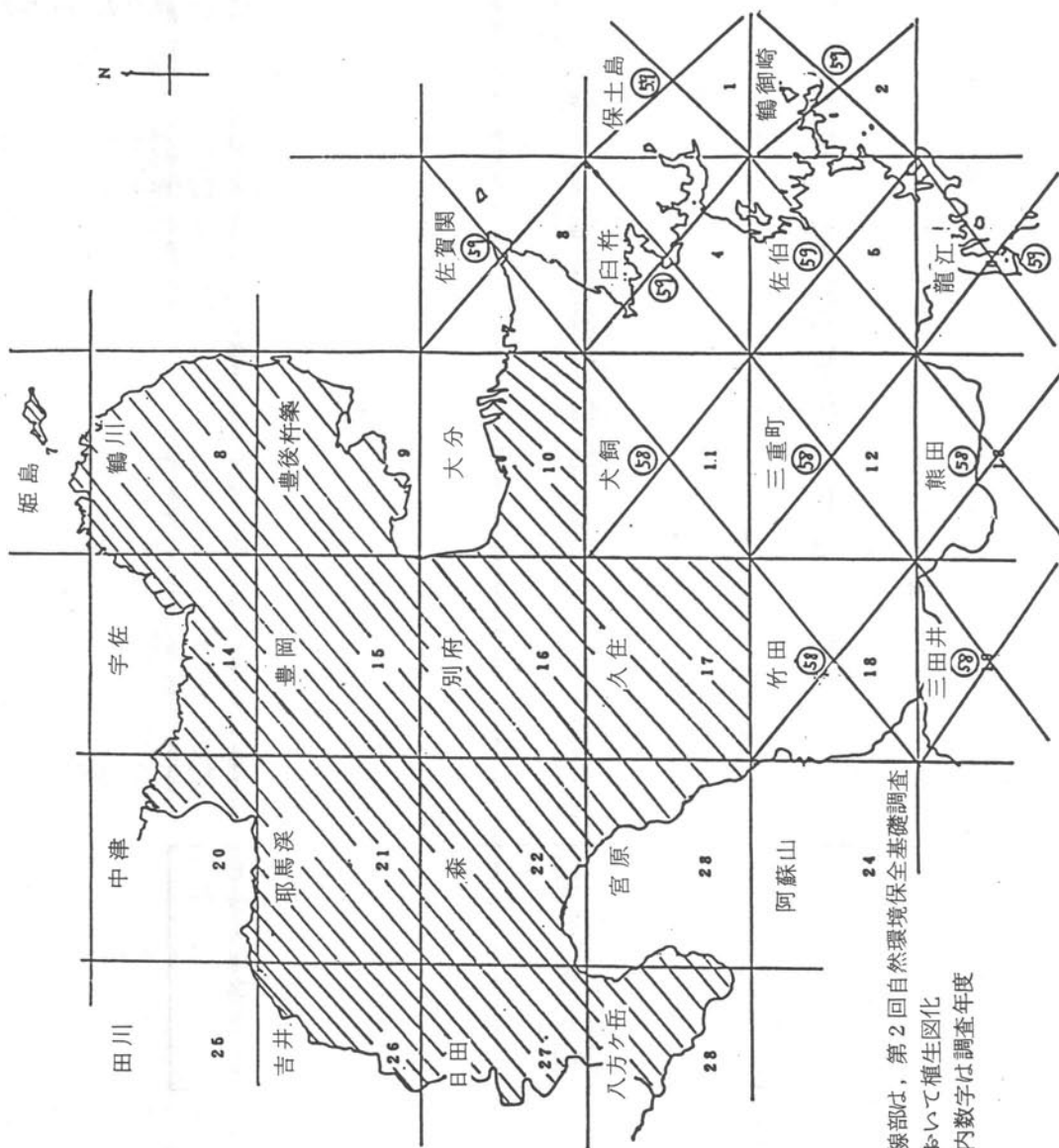
今回の調査対象地域は、下記のとおりであり、範囲はは大分県調査対象地域図に示した。

年 度	5 万分の 1 図幅名 (数字は地図番号)		
58 (1983)	11 犬飼, 18 竹田,	12 三重町, 19 三田井	13 熊田
59 (1984)	1 保戸島, 4 白杵,	2 鶴御崎, 5 佐伯,	3 佐賀関 6 蒲江

② 植生図示と調査表

植生図示にあたっては、現地調査を主にしたが、踏査困難なところは、カラー空中写真を参考に写真判読を含めて相観により判断した。また、第2回調査で使用した「植生調査表」が、今回の植生と質的に類似する32の植生単位については、第2回植生調査報告書に掲載した植生調査表を既存資料として使用した。

2. 大分県調査対象地域図

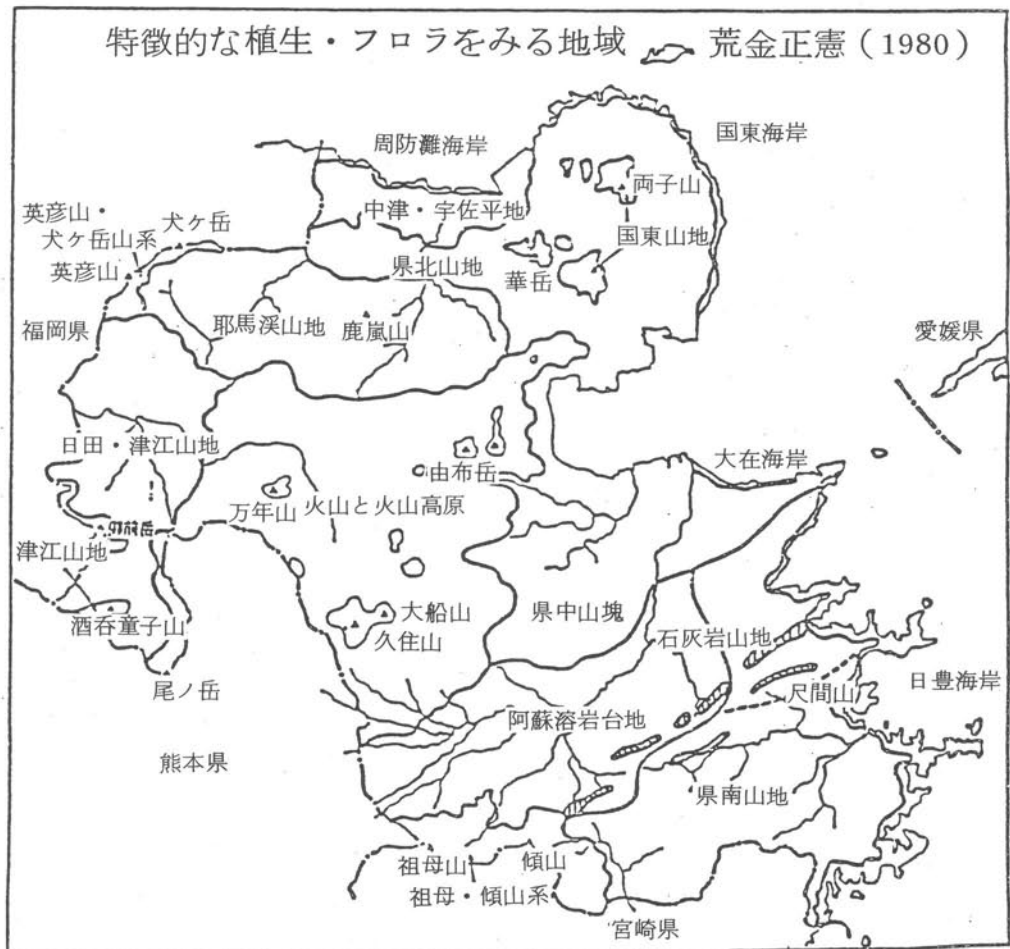


3. 大分県の植生の概説

大分県は九州本島の北東部にあり、その面積は6336.7 Km²，北端は周防灘に浮ぶ姫島で33°44'N，南端は宮崎県境の蒲江浦の32°43'Nである。東端は鶴見半島の鶴御崎132.05°E，西端は前津江村の130.5°Eである。

気温は温暖で、年平均気温16℃の等温線は沿岸部を県南から県北まで走っている。そこには鎮守の森にみるような常緑広葉樹林を繁茂させ、日豊海岸の県南では17℃となって黒潮が洗う無霜地域、亜熱帯植物が生える。等温線はくじゅう火山群を中心とした同心円を描いて低下し、山岳地帯で12～13℃。冬季に30～50 cmの積雪をみる。

そこには、ブナ林など落葉広葉樹林が発達するが、火山山頂帯では季節風効果も加わって高山帯に似た風衝地植生が出現する。



年間降水量は 1600～2600 mm。最多雨地域の英彦山，津江山系などを背後地にもつ日田，山国地方は，広大なスギ植林を支えている。降水量は北へ向けて減少し，周防灘に面する中津・宇佐平野，国東半島が最少降水地域となって，スギに代ってマツ植林が広がり，平地では灌漑用溜池が多く，特殊な水生植生が栄える。

〔地域の植生分布〕

大分県の現存植生図では，植生の分布に地域の特性がうかがわれ，あるまとまりがみられる。そこで，荒金（1980）により，前図のように 16 地域に区分をして，それぞれの植生分布を述べることにする。

(1) 英彦山・犬ヶ岳山系

800～1200 m の山頂帯。下方からアカガシ—ミヤマシキミ群集，ツガーハイノキ群集，ブナ—スズタケ群集がある。尾根部を残しほとんどがスギ植林に代っている。英彦山，鷹ノ巣山のビュート上の岩地では，ヒノキ—ツクシ—シクナゲ群集に含まれるヒノキ群落がある。

(2) 津江山系

釈迦ヶ岳，御前岳，渡神岳，酒呑童子山などの山頂帯 1000～1200 m と御前谷 700～1000 m。山頂及び尾根部のみにミズナラーリョウブ群集，ブナ—スズタケ群集が残る。ウラジロガシ—サカキ群集，アカガシ—ミヤマシキミ群集は散在するが，モミ・ツガ林が立つ山腹は，スギ・ヒノキ植林となって消滅。御前谷にはシオジ—ミヤマクマワラビ群集が残る。九州地方で谷植生を代表する典型的な森林。

(3) 祖母・傾山系

祖母山，傾山を結び夏木山などを含む標高 700～1750 m の山塊。九州本島でも典型的な垂直森林植生帯が発達している。伐採が進み，モミ—シキミ群集，ツガーハイノキ群集の一部と山頂尾根のブナ—スズタケ群集，ヒメコマツ林が帯状に残っている。また，谷にはシオジ—ミヤマクマワラビ群集，ウラジロガシ—サカキ群集，アカガシ—ミヤマシキミ群集やケヤキ群落の残っているところもある。岩角地にはアカマツ林が立っている。

伐採跡地はスギ植林となっているが，不成功地は再生林相が多い。

(4) 火山と火山高原

くじゅう火山，由布・鶴見火山，福万山，平家山などの火山で，標高 1000～1780 m，山頂帯に風衝地ハイデ状のミヤマキリシマー—マイズルスウ群集，岩角地にコミネカエデ—

ナナカマド群集、山腹及び谷にミズナラーリョウブ群集やクマシデーコガクウツギ群集、草原との境界にノリウツギーヤマカモジグサ群集があり、カシワやミズナラの疎林、イタドリーコメススキ群落の初期草原、ミヤコザサなどのササ草原もある。火山高原は500～1200m。ススキートダシバ群集で代表される二次植生である。放牧・採草地、クヌギ・スギ植林、高冷地野菜の耕地が広がり、人工牧野もふえている。また、火山高原には湿原が散在し、ヌマガヤマアザミ群集、ヨシ・スゲ湿原など特殊な植生がある。

(5) 日田・津江山地

日田盆地とその周辺の山地。津江地方の山と谷、標高100～1000m。70～80%はスギ植林。200～300mの丘陵地にサカキーコジイ群集（コジイークロキ群集含む）が散在する。河岸断崖にアラカシージャノヒゲ群集やシイ・カシ萌芽林があり、400～500mの神社境内林にウラジロガシーサカキ群集やアカカシーミヤマシキミ群集の断片がある。

(6) 耶馬溪山地

英彦山から耶馬溪一帯に広がる耶馬溪層や耶馬溪凝灰岩地域。標高200～500m。奇岩がそそり立ち、岩上や尾根にはアカマツーヤマツツジ群集、ときとしてイワシデ群落。断崖にはアラカシージャノヒゲ群集やイブキシモツケ群落がある。谷斜面でウラジロガシーサカキ群集、溪流沿いにケヤキ群落が立つが、岩角地を残してはほとんどがスギ植林、クヌギ植林、シイ・カシ萌芽林である。

(7) 国東山地

国東半島の両子山、文殊山、夷及び鋸山、華岳などの岩角地、標高100～700m。火山岩と耶馬溪凝灰岩。谷にウラジロガシーサカキ群集が残るが散在。岩上にアカマツーヤマツツジ群集、コナラ群落、ときとしてイワシデ群落。断崖にはアラカシージャノヒゲ群集やイブキシモツケ群落があり、耶馬溪山地と似る。

(8) 阿蘇溶岩台地

大野川の中流・上流の台地。標高200～500m。上辺は火山灰地。河岸を中心としてアラカシージャノヒゲ群集、コナラ群落、シイ・カシ萌芽林などの二次林、クヌギ植林が広がり、谷部にスギ植林がある。台地上は畑地となり、タバコ、クワなどが作られ、古くから生産活動が及んでいる。

(9) 石灰岩山地

津久見付近から数条の石灰岩地が傾山山ろくに向けて走り、鍾乳洞をつくったり、地上に露出し山地になったりして、特殊な植生をつくっている。典型的な林としてアラカシと

(10) 県南山地

佐賀関半島の背稜から県南の内陸山地。標高 200～500m。中生代及び古生代の古い堆積層を基盤とし、地形の起伏は大きい。

丘陵尾根にアカマツ林（アカマツ・オンツツジ群集が多い）や、アカガシ・ミヤマシキミ群集、斜面にコジイ林（コジイ・クロバイ群集が県南に多い）が目立つ。アカマツ林（アカマツ・オンツツジ群集を含む）は、虫害で立枯れて減少し、コジイ林も伐採されてスギ植林がふえている。

(11) 県中山地

佐賀関半島の北部から大野川下流域、大分川流域の山地。標高 200～700m。尾根にアカマツ・ヤマツツジ群集やコナラ群落、山ろくをコジイ・クロキ群集が占める。河岸にはアラカシ・ジャノヒゲ群集。シイ林は人為が及んでクロマツ、クヌギ、スギなどの植林や竹林で分断され、シイ・カン萌芽林となっている。

(12) 県北山地

国東半島の丘陵地、宇佐・中津平野の背後山地。標高 100～500m。尾根にアカマツ・ヤマツツジ群集、山ろくにスタジイ・ヤブコウジ群集、コジイ・クロキ群集、イチイガシ群集も立つ。

谷部に局部的にハンノキ群落。自然林のほとんどは消滅し、アカマツ・クロマツ植林が優勢で、クヌギ植林、竹林などの人工林で占められている。

(13) 中津・宇佐平地

水田、畑地、果樹園で代表する。雨が少ないため 200 を越える灌漑用の古い溜池と河川からひいた水路とがある。標高 100m 以下。マコモ、ヒメガマ、アシボソ、ヨシなどが群生するミゾソバ・ヨシ群落やツルヨシ群落が水沢地や水路にみられる。

(14) 周防灘海岸

中津・宇佐海岸。山国川などの河口を含めた遠浅干潟の塩湿地。特殊な環境でシチメンソウ群落、シバナ群落などの塩沼地植生が発達する。近年、護岸・防潮工事が全面に施され、この植生は壊滅状態にある。

(15) 国東海岸・大在海岸

ともに砂丘、砂浜の海岸で、背後に防潮林としてクロマツ植林があり、海岸線と平行して並ぶ。コウボウムギ群落やハマゴウ群落などがあるが、大在海岸は埋立て、国東海岸は砂防工事などで大きくかく乱されている。

ナンテン、ビワ、ユズなどが結びつくアラカシーナンテン群集がある。

(16) 日豊海岸

佐賀関半島から南のリアス式海岸。多くの岬、入江、島があり複雑な海岸線。地塊は古い。気候は温暖であるが、乾燥環境。ウバメガシトベラ群集やハマビワ－オニヤブソテツ群集が海岸崖斜面をおおい、スダジイ－タイミンタチバナ群集も残るが、シイ・カン萌芽林が多い。クロマツ林は虫害で減少したが、今では再生林がみかけられるようになった。海岸崖や砂丘には、ノジグク－アゼトウナ群集、チガヤ－ハマゴウ群集などがある。また、島や岬に点在するアコウ、ビロウの木立も日豊海岸の特徴的な情景である。